

(2016 年 4 月 19 日～26 日)

前回の秋の第 3 回目の後、第 4 回目をその年の 12 月初旬から廻らんと JR 予讃線の「南風」で岡山駅を出発し、本四架橋・瀬戸大橋を渡る手前で携帯が鳴った。老母が入居している岡山の老人ホームからで、何かと思えば体調が少しおかしくなったので市民病院に連れて行ったところ、そのまま入院になったとのことだった。そのような訳で四国に入る前に引き戻されて途中下車し、そのまま岡山に戻った。

その後、老母は 1 ケ月ほど入院して一旦は退院したが、2 月末に永眠した。行年 96 歳。大往生。老人ホームにお世話になって 10 年、毎月 1 回強見舞に行っていたので、自宅と岡山を 150 回ほど往復する結果となったが、マ、お蔭様で行きつけの料亭にも 150 回通うことができてそれなりに楽しかった。

葬儀やら何やらの雑事が続き岡山を往復する毎日であったが、満中陰忌も済んだので遍路に戻った。これからは、暫くの間は亡母を背負って金剛杖の御大師様と「同行三人」で廻るとするか。

さて、今回は陽気も良い季節になったので、野宿遍路ものんびりと巡れるかと期待していたのであったが、生憎の雨ばかり。荷物の嵩を少なくするためにテントは持参しなかったから、壁が無い吹きさらしの遍路小屋では風雨が防げず、やむなく雨の日は民宿に泊まったが、後半も雨が続く予報になったので、当初の予定を半分強で切り上げて区切ってしまったので、苦行も足らず何やら不満足な気分が残った。今回のメインの一つは、前回通らなかった足摺から土佐最後の札所・第 39 番延光寺への海沿いの西廻り遍路道に行くことであったが、足摺岬の第 38 番金剛福寺で打ち切ったので果たせなかった。

この西廻り海岸沿いの遍路道は、風向明媚な奇勝である「竜串・見残し海岸」や古来から二十三夜月待ち講の霊場として名高く、また八十八ヶ所番外札所でもある月山神社を経て宿毛に至る道である。次の札所・第 39 番延光寺への遍路道はこの西廻り以外に、下ノ加江まで内戻って山中の三原村を越えて平田に下る道もあるが、この西回り海岸沿いの道は距離が長く 1 日余分に掛かるので、歩き遍路でも最近是通过る人が少ないらしい。

途中の叶崎（黒潮展望台）にある観音堂に泊めて頂いて観音菩薩（観音サマ）とご一緒に抱っこして寝ネするののも今回の楽しみであったのであるが……。そのような裏心がバレたのか、観音菩薩は雨降神の雷天神に本地垂迹されたのかもしれない。嗚呼。

さて、この西廻り遍路道巡礼は次回の楽しみにとっておくとして、本題に戻ろう。

#### **【4 月 19 日】自宅～岡山駅～高知駅～（バス）～土佐高岡ビジネスホテル**

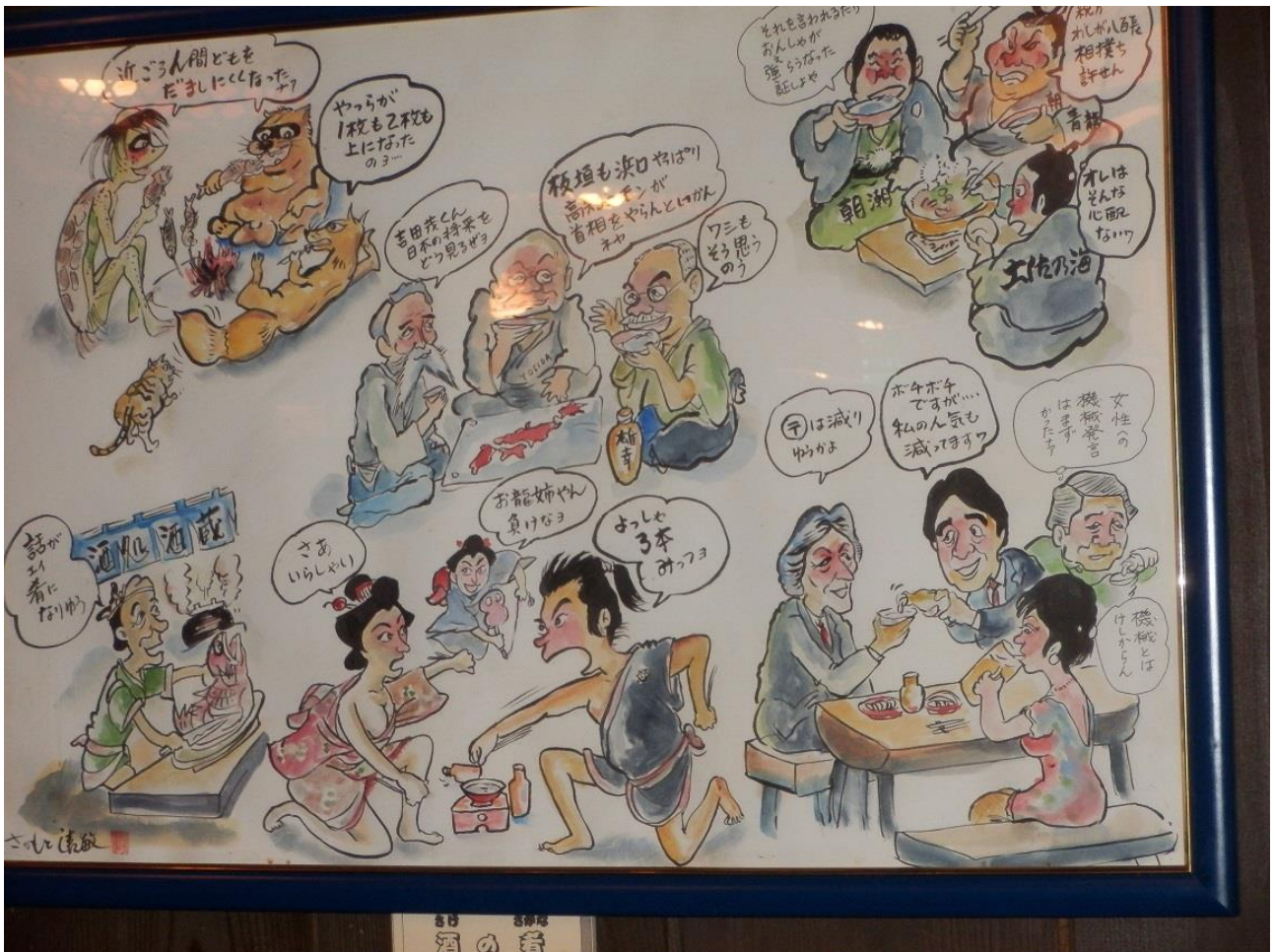
前回は土佐市高岡の清瀧寺で区切ったので、今回は高岡から宇佐に越えてまずは 36 番青龍寺を打ち、浦ノ内湾から須崎、四万十、足摺岬、宿毛を経て伊予に入り、伊予の最初の霊場である 40 番観自在寺まで巡る予定で出発。しかしながら、毎度のことはあるが今までに重ねてきた悪行の数々をお許し頂くには未だ未だ苦行が足りないらしく、神さま・仏さまは雨中の巡礼という苦行をお与えになったので、その苦行に耐えきれず上記のとおり途中で折れてしまった次第。

さて、本日は出発地の土佐市高岡市街まで入って泊まるだけなので、特記事項は何も無い。泊まったビジネスホテルの 1 階にあった居酒屋「酒蔵」で般若湯を頂き、一路旅の平安を祈った。この居酒屋は中々に趣のある店であったので、次頁に写真を掲げて置く。

宿泊＝「ビジネスイン土佐」、5,400 円（値段の割には全く良くない）

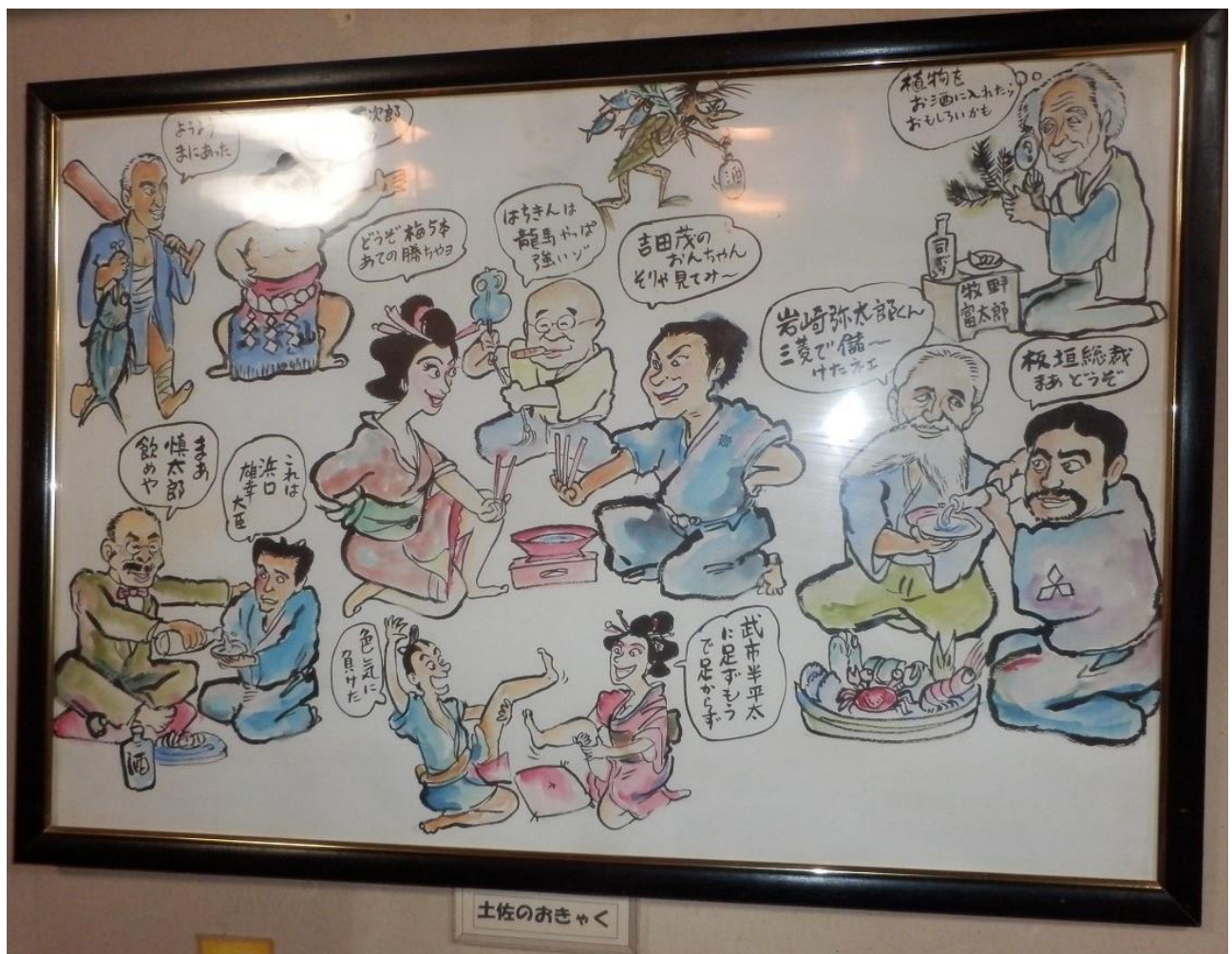


以下に、酒場に掛けてあった絵を2枚ほど・・・。「酒の肴」、「土佐のおきやく」という名の絵。  
土佐弁も生き生きとして腰があり、絵もユーモアたっぷりで、なかなか趣があった。  
地元の常連お客さんの素人の絵だそうだが、なかなかどうしてタダモノではあるまい・・・。



(「酒の肴」の絵。はて、右下の3人はどこかで見たことがあるような・・・?)





【4月20日、晴れ／曇り】高岡～塚地峠（鯉の道）～宇佐町竜第36番「青龍寺」～宇佐<sup>しゅうりょうじ</sup>

塚地峠は、宇佐から高知方面に抜ける山越えの道で、かつては宇佐で上がった鯉を新鮮な内に高岡や高知城下に届けるために魚行商人が駆け抜け登ったので「鯉の道」と呼ばれた由緒ある山道である。峠の天辺には今は展望台が設けられていて、宇佐湾や宇佐大橋、また青龍寺がある対岸の横浪半島の岬が足下に見えた。峠の山道には所々に真っ赤なツツジも咲いていて、新緑に混じる朱色も趣があった。



（塚地峠から宇佐の町と宇佐湾を望む。対岸が横浪半島、右に浦ノ内湾の宇佐大橋が見える）

宇佐に下ってから、まずは“宿”を探さねばならない。今晚予定している“宿”は遍路野宿リストに載っている元「福島バス停」の残置小屋であるが、それがなかなか見つからず探し廻って草臥れた。途中で猫が居たので猫と遊んでいると、その猫を飼っている道端の家のお婆さんが出てきて道を教えてく



れた。その家のすぐ先が元「福島バス停」であった。このお婆さんから千円札のお接待を頂いた。この千円札は、一昨年5月の巡礼の折に讃岐「道隆寺」で近所のお爺さんから頂いた指先大のお地蔵様に着せた2枚目の蓑となった。1枚目は昨年秋に土佐の香我美遍路小屋で近所の人から頂いた千円札である。



(道路奥左の白い小さな小屋が今晚の“宿”、元「福島バス停」小屋。海は浦ノ内湾、対岸は横浪半島)



(掃除が行き届いていてゴミひとつ落ちていなかった)

宿に荷物を置いて空身で宇佐大橋を渡って青龍寺に詣でた。宇佐の港町と青龍寺がある横浪半島の「竜」は浦ノ内湾で隔てられていて、すぐ目の前でありながらかつては「竜ノ渡」と呼ばれた渡船でしか渡れなかったが、今はここを跨ぐ宇佐大橋ができたので渡舟の姿は消えた。しかし、この宇佐大橋は橋長が1kmあり、また橋高も高くてアーチ坂になっていて歩いて渡るにはキツイので別名「しんどい橋」とも呼ばれているそう。地元の古老の話では、昔の渡船の方が難儀が無くて良かったとのこと。

第36番札所青龍寺は縁起によれば、弘法大師が、唐から日本に帰国する際、真言密教の奥義を授け

てもらった唐の青龍寺の恵果和尚の恩に報いるため、「約束の地に飛んで行け」という願いを込めて東の空に独鈷を投げた。帰国後、この地の老松に独鈷が刺さっているのを見つけ、建てたとされている。

従がって山号は独鈷山であり、寺号も唐の青龍寺に倣った。本尊の波切不動明王像は大師が入唐の際、暴風雨を鎮めるために現れたと伝えられ、いまでも航海の安全や豊漁、世間の荒波をも鎮めてくれる不動明王として深く信仰されている。

その独鈷が掛かっていた老松があった場所が奥之院である。青龍寺から山道を伝って奥之院に参った。途中で横浪スカイラインを横切るが、結構な山坂道で普通は誰も歩いていないようだった。岬の突端に立派な堂宇があった。奥之院不動堂。この不動堂の断崖絶壁の下の荒磯に修行の洞窟があり現在でも時折修行僧が籠ったりしているらしいが、この洞窟へは舟でしか渡れないそうで、上から恐る恐る覗いては見たものの200m ロープでの懸垂下降でもない限り降り着けそうもなかった。



(波切不動明王 御影)



奥之院からは、ウネウネと蛇行している横浪スカイラインを「竜」まで下ったが随分長かった。途中、「五色の浜の横浪メランジュ」とかいう国指定の天然記念物の断崖を覗いたりした。これは、プレートテクトクス理論が陸上で初めて確認された地点として世界的に有名な場所であるそうだが、その方面にはチンプンカンプンの小生には、只々太平洋の荒波が寄せ砕けているザアザアという潮騒が聞こえてくるだけであった。嗚呼。

奥之院まで登って重くなった足を引きずって「しんどい橋」の宇佐大橋を渡り返して宇佐の町に戻った。宇佐の町には居酒屋や食堂なるモノが殆ど無い上に、時間が未だ早いので般若湯を頂ける店がみつからなかった。たった一軒の「活魚海賊料理 新漁丸」という漁師食堂が開いていたが、本日は宴会で予約貸し切りとかで、酒なら出せるが料理は簡単な出来合いしか出せないとノタまわれた。それで、出来合いの茹で海老を肴に生ビ3杯をチビチビと吞みつつ、どこかの居酒屋が開く頃までの時間を潰した。これでたったの1,600円とは安くて泣ける。店の壁には、かつて中浜万次郎が乗り組んで漂流した船の船主がこの店の先祖だったと黒々と墨書された大きな額が掛かっていた。

そこを出て、どこかに居酒屋はないものかと、ブラブラと海岸沿いの道を歩いていると、「籠屋」という看板のある店に自転車 came オカアサンが鍵を開けて入るのが見えた。名前からは和風居酒屋のような趣であったが、入って見るとカラオケバーの雰囲気、地元のカラオケ好きが常連で来る店のようだった。こちら、「風の盆」と「め空へばり」を唸った。ベラフォンテのダニーボーイは無かった。地元の常連で満員になってきたので、ビールを何本か飲んで引き上げた。今宵の“宿”からは結構離れ



ている場所だったので、千鳥足で車に轢かれたら地元の人や御大師様に迷惑を掛けることにもなろうかとタクシーでバス停小屋にご帰還遊ばされた。タクシーでこの小屋に乗り着けた酔狂な遍路は小生くらいなものだろう。

●9:00 高岡発、9:50 塚地峠登り口（休）、10:30 塚地峠、12:00 元福島バス停小屋、12:30 同発、13:40 青龍寺、14:30 奥之院、16:30 宇佐帰着 ●本日の遍路距離 歩：17km

#### 【4月21日、雨】宇佐～横浪～洲崎・多ノ郷

本日は雨の予報だったので、前回と同様に埋立から横浪まで巡航船を利用した。横浪からはバス便も無いので合羽を着て歩いたが、靴の中を雨水がチャボチャボと流れる始末。

須崎に出る手前の道端に須崎遍路小屋があり、今晚はここにお世話になる予定でいたので、荷物を降ろして野宿を決め込んでいたが、段々と風雨が激しくなってきたので、やむなくここから一番近い洲崎・多ノ郷駅前の旅籠に泊まった。一福旅館（マア良、素泊まり 4,300 円）。近くの赤提灯は未だ開いていなかったもので、多ノ郷駅前の長太郎食堂で一杯。偶々居合わせた二人連れのお客さんからビール瓶 1 本のお接待を頂いた。



（須崎遍路小屋）



（一福旅館）



（長太郎食堂）

●7:00 埋立発（巡航船）、8:00 横浪栈橋着、10:00 洲崎遍路小屋（13 時まで雨宿り）、14:00 多ノ郷旅館着  
●本日の遍路距離 巡航船乗船：10km、歩：たったの 9km

#### 【4月22日、快晴】洲崎～窪川・37 番岩本寺

須崎から次の札所（37 番岩本寺）がある窪川までは 40km 近くあり、その間には野宿に適した遍路小屋が無いので、多ノ郷駅を朝一番の下り列車に乗り、窪川への山越えが始まる土佐久礼駅まで飛天の術を使った。久礼からはかつて高知と窪川を結んでいた山越えの「土佐往還」を越えなければならない。ここを越える遍路道には「添蚯蚓」と「大坂谷」という 2 ルートがあり、前は前者を選んだので今回は後者を通ってみることにした。

後者の遍路道の入り口には、「お遍路さんへ、森林伐採中につき、通行禁止。国道 56 号へ廻って下さい」という看板が数カ所に掲示されていた。国道経由はウネウネと曲がった道だから歩行距離が随分長くなる。まあニャンとかなるだろうとこの看板を無視してズンズンと登って行った。

前者は暢やかな稜線通しの遍路道であったが、今回の大坂谷越えの道は急で狭い谷を登り詰めて行く暗い道で、展望にも恵まれずおまけに最後は急坂のキツイ道であった。しかし、暗くてジメジメした



樹林の最後の急な山道を登りつめた途端、一気に七子峠に飛び出して、足下には久礼から土佐湾の海の眺望が広がり、キツかった大坂谷の山道の苦労を償ってくれるに余りあった。

七子峠の広場にはウッドデッキの展望台が設置されていて、このデッキの上にテントでも張れば快適な山上の庵が結べるであろう。水は、峠の茶屋（廃業）のトイレで取れるようだった。ただ、店や酒屋は全く無いのが難点。折から快晴。昨日雨で濡れた衣類を乾かしがてら、ザックに忍ばせておいたウメッシュをチビリチビリ飲みながら、1時間ほどヒルネをした。

（大坂谷の遍路道⇒）



（展望台のデッキで濡れた衣類を乾かす）

七子峠には中国人観光バスが停まっていて乗客は峠のトイレを使っていた。そういえば、今年は特に外人の遍路が多いようだった。中国や韓国人が多いが、白人も多い。中国人は団体で来るのでその喧しさには全く往生する。彼らが団体で来るとお寺での参拝などやっておられるものではない。

さて、七子峠からはズット国道 56 号を歩いた。窪川の町の少し手前にある道の駅「あぐり窪川」の少し手前の遍路道を歩いていたら、「お遍路さん、どうぞお茶でも」と呼び止められた。お邪魔してみると、なかなか由緒がありそうな民家で、豆から挽きたてのおいしいコーヒーと茶菓子を出して下さった。聞いてみると、最初は地元のプロジェクトを指導するために東京から来ておられたボランティアだったそうで、今もそのままここに居ついて遍路のお世話をやっているとのことであった。上品なご夫婦であった。窪川は南国高知ではあるが、冬は非常に寒い所なので、冬場だけは暖



（七子峠から土佐湾の眺望。橋は高知自動車道）



（お接待処「風自遊庵」ご夫婦）

（右は一期一会の東京・狛江市の生田さん）



かい(?) 東京に帰って避寒されているようだ。

帰宅してから、ネットで調べてみると、この御夫婦は石坂さんという東京・町田市の方で、この遍路接待処を「風自遊庵」(ふじゆうあん)と名付けられ、また「髭と四万十」というブログも出しておられた。地元地域の人的活性化に繋がるようなコミュニティー活動もやっておられるらしい。このような方が地元に加わっておられると、“シャッター街”になってしまった田舎の町も元気が出てくるのではなかろうか。序の余談ではあるが、翌日通った人口1万人ばかりの幡多郡黒潮町では、“私たちの町には美術館はありません。美しい砂浜が美術館です”のうたい文句でケニアの人を砂浜美術館長に迎えている。このように、土佐では外者を迎え入れる気風があるのかもしれない。そういえば、四国はどこでも“外部からの移住者大歓迎”だそうで、これは四国だけでなく全国の過疎地に共通な活性化対策であろう。

岩本寺では、通夜堂に泊めて頂いた。台湾から来たという単独行の若者と同宿であった。この通夜堂は寺の駐車場の隅にあるおんぼろガレージであった。昨年泊めて頂いた同じ土佐の種間寺の通夜堂もガレージではあったが、種間寺のそれは民宿並みの畳の部屋であったのに対し、こちらはコンクリ土間だけの物置であった。マ、泊めて頂けるだけでも有り難いというべきで、文句を言う筋合いは無いのでア〜ル。全く修業が足らん。



(ガレージの通夜堂)



(左の襦袢布は台湾の若者のシュラフ)

通夜堂に早くから寝る訳にもいかないので、ここの夜遍路は4軒ハシゴをした。門前の通りをブラブラ歩いていたら、横丁に安そうな居酒屋があった。カウンターに座って大将と四方山話をしながら、焼鳥を齧ってビール3本ほど飲んだ。居酒屋「さくら」3,200円。

「さくら」店内



次に、昨年1月の遍路の時に泊まった美馬旅館の料亭を訪ねた。実は、この旅館は昨年泊まった時には知らなかったのだが、偶々今年になって読んだ車谷長吉という作家の「八十八ヶ所感情巡礼」(文芸春秋刊)によれば、彼夫婦がこの旅館に泊まった時に、宿帳を見た女将が“私はあなたのファンで著書

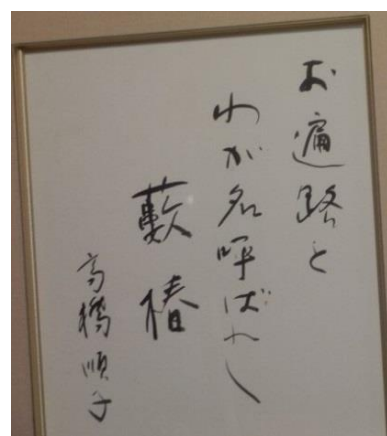
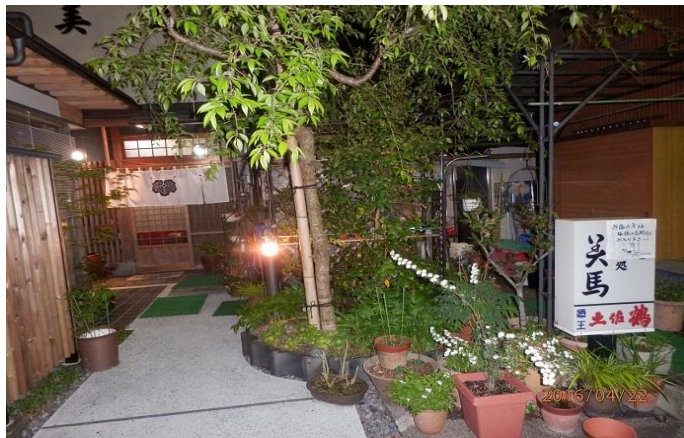


は殆ど読んでいると”聞いてびっくりしたと記している。車谷長吉というのは、私は初めてこの本を読んだだけだが、「赤目四十八瀧心中未遂」で直木賞を受けた作家で、他に三島由紀夫文学賞、川端康成文学賞、平林たい子文学書も受賞した作家だそう。夫人は詩人の高橋順子だそう。

そのような次第で、再び美馬旅館に行って今回は料亭に座った。女将にこの話をしたら、彼女曰く「あの巡礼の本は下世話の話ばかりで、ちょっとお下劣。それに比べれば詩人の奥さんの立ち居振る舞いの方が相当上品だったワヨ」。確かにこの本には車谷長吉が巡礼の間に札所の参道、遍路道の道端、畑の中、山中で野糞をしたり、間に合わなくてパンツの中に漏らしたりしたことが延々と書いてある。数えてみたら79ヶ所あった。彼は精神病治療薬を飲んでいるので排便がコントロールできない為にこうなるのだそうだが、或いはこのような趣味があるのと違うか？例えば、“長吉の菅笠揺れて麦畑”（夫人の作）。

また、この本には、“今日は順子さんのお乳とお尻を撫で撫でした”などという件<sup>くだり</sup>も出てくる。そちらの方の気もあるのではなからうか？しかし、昨年黄泉の国に旅立たれた。

料亭「美馬」に掛かっていた  
車谷夫妻の額 ⇒



美馬旅館の近くに「侍」という面白そうな看板があったので入ってみた。左程面白くもなかったが、高知名物とかいうイタドリ<sup>イタドリ</sup>の煮物、豚五郎という鰯の唐揚げを食ってみた。どうということも無かった。

寺の通夜堂に帰ろうと門前の角を歩いていたら、ちょっと粋そうな看板があったので、寄って見た。「なるほど」。

何やら、吉田類の「酒場放浪記」もどきになってきたナ。そろそろガレージの通夜堂に帰って寝よう。

- 7:06JR 多ノ郷駅乗車、7:45 土佐久礼駅発、  
9:05 高知自動車道高架橋下、10:30~11:45 七子峠、  
14:30~15:30 窪川手前お接待処「風自遊庵」  
16:45 岩本寺

- 本日の遍路距離

JR 乗車：15km、歩：22km



【4月23日、晴れ⇒雨】窪川・岩本寺～拳ノ川・佐賀遍路小屋～黒潮町伊与喜「農家民宿・かじか」

空模様がはっきりしない。朝は晴れていたのだが、市野瀬から拳ノ川峠に差し掛かった昼前頃から雨模様になり、佐賀温泉「こぶしのさと」に着いた時には本降りとなってきた。本日の泊まりの予定はここから更に13km程先の土佐白浜の四阿を予定していたが、大雨の中を歩くのもキツイのでここにある遍路小屋（佐賀遍路小屋）で暫く天候待ちをすることにした。しかし雨は止む気配が無い、仕方ないので、未だ正午過ぎで時間が早いが今夜はこの遍路小屋に泊めてもらうことにして腰を落ち着けた。



← ↓ 奥の白衣の像は弘法大師像



(ネオン<レストラン>の奥左が遍路小屋)

しかし、何もすることが無い。持ってきた宥辨真念の「四國徧禮道指南」や五来重の「四国遍路の寺」などを拵げてはみたが、もう何回も見飽きているので気が乗らない。宮本常一の民俗の本「ふるさとの生活」は結構読み進められたが、これも飽きてきた。レストランが直ぐ傍にあるので、ビールでも飲めば良いのであるが、万が一天候が回復したら早々に歩き始めねばならないので、般若湯を頂く訳にも参らぬ。アッ、そうだ、この温泉の看板には「日帰り入浴アリ」と書いてあったゾ・・・。雨の中の露天風呂もなかなかによろしかったが、温泉の入浴で一気に力が抜けてヘナヘナと軟弱になってしまった。

外は雨が段々激しくなってきた、弘法大師の背中から雨粒が吹き込むようになってきた。遍路小屋の造りはどこでも同じようなもので、屋根はあるが壁が無い四阿である。その屋根も狭いので、ちょっと風が吹けば雨が吹き込むのだ。仕方ない、かなり値が張りそうだがそうだが今晚はこの温泉ホテルにでも泊まるかとフロントに申し込むと本日は満員御礼だそうで、6kmほど離れた市野々川の農家民宿なるものを紹介・予約してくれた。そこのオカアさんが大雨の中を車で迎えに来てくれたのが有り難かった。

大きな農家の離れを民宿用に改造した民宿で「農家民宿 かじか」という。黒潮町市野々川在。山峪の田園地帯で田植えに備えて田圃に水が張ってあった。かじかの鳴き声も聞こえてくるようであった。





この民宿は外人遍路も沢山泊まるそうで、直接アメリカから電話で予約してくる人もいるそうだ。本日の泊まりは小生一人だったので、二間続きのゆったりした部屋を使わせて下さった。急な予約なので食事の用意はできないが、とりあえず天婦羅蕎麦をどうぞとお接待があった。天婦羅は自家製の揚げ立てで温かくて美味かった。山里の菜種梅雨に包まれた静かで野趣のある夕べであった。

翌朝、鶏のコケッココと雉のケンケンの声で目が覚めた。コケッココは庭に放し飼いになっている土佐ジローという種類の鶏で、卵の美味さは四国一であるそうだ。そういえば、今日歩いた国道べりにも「四国一美味しい鶏卵、土佐ジロー」という看板が諸処に大きく掲げてあった。ケンケン



(庭に来た雉)

は毎朝裏山から庭に遊びに来るのが日課だそうで、1時間ばかり土佐ジローと遊んでいくのだそう。ご主人の話では、雉はたいてい夫婦で住んでいるのだが、この辺には雉はこの1羽しか居らず、このケンケンは淋しい独り者で気の毒だと言っておられた。一汁一菜の朝食が出たがこれもお接待だった。ご飯が良い香りがした。この辺りで栽培されている<sup>かおりまい</sup>香米を混ぜて炊いたご飯だそうで、香米というのは貴重で高価な品種だそうだ。今朝採りたての土佐ジローもご飯に混ぜてどうぞと言われたが、残念ながら生卵アレルギーの小生には誠に残念であった。

この民宿はHPを開設しておられて、オカアさんがブログを週に数回更新されている。何ということもない日常の農作業などを切り取ったものであるが、土佐弁を交えた朴訥で穏やかな語り口がほのぼのとさせる。外人客も多いのでHPには英文の翻訳も併載されていた。

<http://kuroshiokajika.sakura.ne.jp/>

(夕蕎麦+朝食の接待付の素泊りで4500円)

●7:45 岩本寺発。途中、乞食遍路と話し込んだり、峰ノ上の遍路道を探してウロウロしたり、1時間ほどヒルネしたりで2時間ほど道草、11:00 市野瀬、12:00 拳ノ川・佐賀遍路小屋、⇒17時農家民宿

●本日の遍路距離 16km(内、歩はたったの11km)

#### 【4月24日、曇り⇒雨】市野々〜熊井トンネル〜土佐佐賀駅〜海の王迎駅〜入野松原〜四万十大橋

農家民宿のアカアさんに国道まで車で送って貰い、そこから山道に入って熊井トンネル経由で「土佐くろしお鉄道」土佐佐賀駅に出た。熊井トンネルは、土佐の“天城トンネル”だそうで、なかなか趣があるレンガ造りの古道であった。



「熊井トンネル」  
明治38年(1905年)12月に  
工事が完成し、長さ90メートル  
あり、「トンネル」というものは  
入口は大きいが出口は小さいも  
のぢやのう」と言った人がある  
という。  
レンガは佐賀港から1個1銭  
の運び賃で小学生などが1〜2  
個ずつ運び、熊井側入口の石張  
は2人の職人が右と左にわかれ  
腕前を競ったと言われる。  
昭和14年(1939年)までは  
県道として利用され、現在は  
わずかに土地の人の通行に利用さ  
れているのみである。  
近代土木遺産に指定されてい

昨日は、予定の泊まり場(土佐白浜の四阿)から8kmほど手前でトンヅラしてしまったので、今日は少し天狗の術を使わないと目的の四万十大橋の袂まで辿り着けないから、土佐佐賀駅から「海ノ王迎<sup>おうむかえ</sup>駅」まで太平洋の荒磯の絶景を見ながら20分間ほど飛天の術を使った。土佐佐賀はカツオ一本釣りで

有名な漁港町である。「海ノ王迎」とは特異な地名であるが、地名の由来は鎌倉時代に後醍醐天皇の子、尊良親王が流刑された地で、海から王を迎えた地と言うことで名づけられたそう。四国は昔から崇徳上皇はじめ貴種が流された地でもあった。特に土佐は補墮落渡海の信仰が盛んな地でもあったので、これにも絡んで貴種流離譚が盛んに作られたのかもしれない。



(海ノ王迎駅、ホームだけの無人駅、左は太平洋)

さて、ここから海岸沿いに入野松原を歩いた。ここは長さ4kmに亘って整備されている広大な海浜公園で「土佐西南大規模公園」となっている。砂地は一面のラッキョウ畑となっていて、大きなパラソルの下で収穫作業が行われていた。



(入野松原のラッキョウ畑)

ここからの遍路道は、そのまま海岸沿いに四万十川河口の「下田ノ渡し」に至る道と、山越えで竹島の四万十大橋に出る道の二つがある。下田ノ渡しで四万十川の河口を対岸に渡るのが一番近いのであるが、この下田ノ渡しは天気と船頭の塩梅でしょっちゅう欠航となる。その場合には、4kmほど四万十川を遡って四万十大橋まで戻って渡るしかないが、去年もこれに引っ掛かってしまった。車社会の今時、フェリーでもない渡船に乗る物好きは対岸に特別な用事でもある老人か歩き遍路くらいなものだろうから、コスト割れで運行できないのかもしれない。

という次第で、今回は山越えの道を選んだが、これがまた相当の難物であった。約4km程の広域農道であるが、ウネウネと曲がった坂道である上に道路標識も全く無く、分岐で道を聞こうにも人家も人通りも全く無い山中であった。歩道も無いので車も怖かった。峠には一か所だけ展望台があったが(右写真)、他は山ばかりで何の展望も得られず、ただただ黙々と足を前に出すだけ。マ、これも苦行の内であろうか。



雨の中をヨタヨタと歩いて、四万十大橋手前の竹島に到着。今晚はここにある竹島大師堂に泊めて頂くことにする。この御堂がある場所は、四万十大橋ができる前は「大師の渡し」という渡船場があった所で、当時の河岸が残っていた。この大師堂は、近所の人々が参詣を絶やさない霊場だそうで、掃除も行き届き新鮮な花も供えてあった。近所のオバサンが花を持ってお詣りに来られたので宿泊のお許しを乞うて世間話をした。この竹島大師堂は一度は泊めて貰いたいものと狙っていた御堂であった。





(旧大師の渡し、左が四万十大橋)



(竹島大師堂外観)



(堂内祭壇、大師像と百万遍供養塔)





この近くにはコンビニもあるので般若湯と弁当を買って、御堂の中で四万十川の流れを聞きながら葎酒山門に入るを許すのも悪くないが、御堂の中には上のようなお札も掛かっていたし、やはり弘法大師像の前では般若湯も落ち着いて頂けないので、ここからちょっと遠いが歩いて1時間弱の土佐くろしお鉄道「古津賀」駅前まで行くことにして四万十川の土手を歩いて行った。古津賀は四万十市の中心街「中村」（四万十市の旧市名は中村市）のすぐ隣の町である。大きな町であったが大都市の中村市街がすぐ近くにあるためか居酒屋は見つからず、やっと見つけた回転寿司屋でお茶を濁し、帰途運よく見つけた赤提灯のお好み焼き屋でジョッキを重ねて、千鳥足では車に轢かれて遍路墓に葬られるのも地元の方々の迷惑となるので、タクシーで竹島大師堂にご帰還遊ばされた。このような御堂で寝たのは生まれて初めてであった。信心深い方は御大師様の胸に抱かれて眠るというのも喜ばれようが、不信心な小生などは酒気抜きでは恐れ多くて、怖くて、うなされて寝られないと思うが、今宵は般若湯のお蔭で悪夢にうなされることも無かった。

- 7:00 農家民宿発、8:40 土佐佐賀駅、同 8:51 乗車、9:10 海ノ王迎駅下車、14:30 竹島大師堂
- 古津賀 「寿司一貫」2,400 円、お好み焼き屋 1,500 円、タクシー1,000 円。
- 本日の遍路距離 28km（内、歩 20km、飛天 8km）

#### 【4月25日、曇り⇒昼前から雨】竹島大師堂～足摺岬 38 番金剛福寺～土佐清水～中村～高知駅

一昨日泊まった農家民宿のオカアさんも言っていたが、今年は雨ばかりで既に梅雨に入ったような塩梅で毎日毎日雨ばかり。今回は雨に濡れて歩く苦行も充分に(?)行っただけで、今日はバスに乗れる所はバスで稼ぐことにした。

また、今日の遍路道は四万十市の今大師から土佐清水市の市野瀬に抜ける新伊豆田トンネル 2km の歩道も無い狭い車道を歩かなければならず、この真っ暗なトンネルを車に煽られながら歩くのもロートルには苦行であるから四万十大橋を渡って 4km ほど先の津蔵淵から足摺岬入口手前の大岐ノ浜まで 40 分間ほどバスで飛天した。

バス停から大岐海岸に向かって下って行くと、その先の喫茶店らしき店の中からこちらに向かって手を振っている遍路姿が見えた。窪川のお接待処「風自遊庵」



（四万十大橋から四万十川河口）



で遇った狛江市の生田さんであった。モーニングを喰っているとのこと、ご一緒させて頂いた。ここからは大岐ノ浜を歩いた。浜のドンツマリの川は増水で徒渉できず、松林に戻った。東京から来たという逆打ちの遍路氏が大岐海岸に打ち上げられたビニールなどのゴミを独りで掃除しておられた。頭が下がる。

今日の泊まりの予定は、足摺半島東海岸の津呂にある遍路小屋であるから、以布利漁港から土佐清水方面への幹線道路を捨てて、東海岸への海沿いの小径に入ったが、折から大粒の雨が降り始め、おまけに海沿いの径であるから吹き降りとなった。傘もジョウゴになった。菅笠も風で飛ばされてしまう。郵便局の軒下で暫く雨宿りをさせて頂いたが、止む気配も無い。傍にバス停があった。見ると 30 分ほど待てば足摺岬行のバスがあるではないか！ ここで萎えてしまった。全く苦行が足らんワイ。天気予報では明日からの 4 日間ほどは雨の連続。

予定では、明日足摺岬の 38 番札所金剛福寺に参った後、その後 5 日間ほど掛けて、土佐清水から西海岸回りで竜串海岸から宿毛に至り、土佐最後の札所「延光寺」を打った後、土佐から伊予に入って伊予 1 番札所の愛媛県愛南町・観自在寺に参ることにしていたが、修業が足りないのか帰心矢の如しと相成って、足摺岬行のバスに飛び乗り、この日の内に 38 番を申し訳程度に参って、そのままバスで土佐清水、中村経由で高知駅まで舞い戻り、昨年も 2 回ほど泊まった駅前の旅籠「土佐別館」に泊まった。B&B で 4,500 円。優。



今夜の夜遍路は、前にも行ったはりまや橋近くの「夢の里」。3,250 円。

●本日の遍路距離(四万十大橋⇒足摺岬・金剛福寺) 38km 内、歩はたったの 9 km

※翌日、岡山まで帰り、その夜は岡山駅前に泊まって、堀君と二人で彼の全快祝と称して 2 軒ハシゴをした。「路台」、「六三」。前者は堀君の小学校の同級生、後者は操山高校の同級生がやっている店。  
(何れも女友達)

(その 4 了)

「四国遍路野宿ノ記」目次に戻るには、画面最上段最左端の戻るボタン  で戻って下さい